

# 渦中の 農力

度重なる異常気象や未知のウイルスの流行など、波乱な情勢となった2020年。過酷な事態のなかで、生産者は何を思い、何を行ったのか……2020年の栽培過程を振り返りながら、渦中から未来を見据える生産現場のすがたに迫ります。(4号連載予定/第2回)



## ネギ

農事組合法人

## アグリあいかわ



秋田市雄和相川地区の農家38名で構成。ネギ2ヘクタールと水稲41・4ヘクタール、枝豆6・5ヘクタール、大豆3・5ヘクタールを営み、現在4年目。代表理事は伊藤洋文さん(67)(後列右から2人目)。

—— 貴法人のあらましを教えてください。

高齢化が進むなかで集落の農地を次世代に繋ぐため、平成29年2月に設立して4年目になりました。作業従事者のほとんどを地元の相川地区から雇用していて、水稲のほかに園芸作物も手掛けることで年間仕事に絶えないようにして、地元の経済にも貢献するよう心掛けています。

平成28年に閉校した旧戸米川小学校を活用して、平成30年にライスセンターを建設しました。ネギの圃場は秋田県農業試験場の北側にある、雄物川に近い2ヘクタールです。ライスセンターと同じく旧小学校の敷地内にあるネギの作業所で洗浄や皮むきなどの作業を行い、全てコンテナ出荷をしています。

—— 今年のネギの栽培を始めるにあたって、新型コロナウイルスの影響などはありましたか。

当法人はネギと枝豆におけるサテライト型の園芸メカ団地でもあり、3年目にあたる今年は、面積が昨年より拡大しています。JAからの提案でコンテナ出荷を行い、販売先が決まっているため、大きな心配がなく、いつも通り取り組むことができました。

